読む、観る。くまもとアートポリス。

「ビデオくまもとアートポリス1992」より

くまもとアートポリスを読む。観る。
まちづくりに関わるさまざまな人、組織、工夫はアートポリスの財産である。都市計画、自然環境、建築行政、建築設計、建築施工、建築の運営・管理、あるいは日常的な暮らし、住まい方など、アートポリスで提案が行なわれ、研究が重ねられている。研究や議論、新しい試みとその試行の過程——くまもとアートポリスでは、この貴重な経験を記録し、出版を行なってきた。これは同じくまちづくりの事業に関心を持つ人々と意見を交換するためのテキストでもあり、また、自分の住む環境に関心を寄せる人のためのガイドブックになればとの思いを込めて作られたものである。

■くまもとアートポリス関連出版物
くまもとアートポリス'92公式記録集（全7冊）
くまもとアートポリスニュース(0号～10号)
くまもとアートポリスガイドブック
くまもとアートポリスガイドマップ
ビデオくまもとアートポリス1992 (VHS方式)
くまもとアートポリス絵葉書
雑誌「SD」91年1月号くまもとアートポリス特集
「12のアーバンデザイン」KAP'92実行委員会編／INAX
*特記なきものはくまもとアートポリス事務局発行です。
購入ご希望の方はKAP事務局までご連絡ください。

アートポリス'92 出版物

私も見た アートポリス

●「くまもとアートポリス」を県外から見学に訪れたおもな見学団体等一覧（事務局で確認されたものを掲載）

［海外］
英国北アイルランド省、ASEAN諸国公務員、香港南区、韓国光州直轄市、フィンランドサイエンスパーク、オーストラリアアデレイド市、フランス建築家協会、オランダ建築家協会、韓国新聞各社、米国テキサス大学院、中華人民共和国同済大学、ドイツシュツットガルト大学

［政府］
衆議院法制局、総理府、国土庁、運輸省、建設省、自治省、会計検査院、最高裁判所

［都道府県］
全都道府県、宮城県議会、岐阜県議会、静岡県議会、鳥取県議会、東京都住宅供給公社、長崎県住宅供給公社

［市町村］
旭川市、北見市、岩見沢市、帯広市、苫小牧市、富良野市、東神楽町、陸別町、釧路町、標茶町、江差町、青森市、八戸市、宮城県河原町、秋田県五城目町、福島県三春町、塙町、本宮町、南郷村、泉崎村、笠間市、水戸市、結城市、茨城県十王町、日光市、埼玉県杉戸町、小川町、大里村、千葉市、船橋市、千葉県栄町、千代田区、台東区、中野区、世田谷区、足立区、練馬区、葛飾区、豊島区、調布市、小平市、横浜市、相模原市、川崎市、三浦市、新潟市、富山県八尾町、福井県丸岡町、長野県明科町、岐阜市、多治見市、静岡県大須賀町、清水町、名古屋市、碧南市、東海市、愛知県西春町、田原町、鈴鹿市、大津市、八日市市、長浜市、京都市、宇治市、舞鶴市、大阪市、茨木市、八尾市、堺市、泉大津市、神戸市、伊丹市、西宮市、洲本市、明石市、赤穂市、川西市、兵庫県篠山町、出石町、奈良市、奈良県吉野町、和歌山氏、出雲市、島根県津和野町、倉敷市、岡山市、津山市、広島市、広島県高野町、宇部市、美弥市、下関士、徳島市、阿南市、徳島県那賀川町、池田町、高松市、丸亀市、香川県琴平町、大野原町、高知県佐川町、[illegible]原町・北九州市・福岡市・久留米市・飯塚市・大牟田市・甘木市・前原市・福岡県三輪町・二丈町・唐津町・武雄市・佐賀県有田町・島原市・諫早市・長崎県波佐見町・大分市・別府市・大分県三重町・宮崎市・西都市・宮崎県三股町・日之影町・諸塚村・川内市・鹿児島県喜界町・那覇市・浦添市・平良市・沖縄県南風原町・船橋市議会・静岡県岡部町議会・神戸市議会

［学校関係］
東京大学・東京都立大学・東京学芸大学・日本大学・日本女子大学・法政大学・早稲田大学・東洋大学・東京工業大学・東京家政大学・横浜国立大学・神奈川大学・岐阜高専・京都工繊大学・京都精華大学・大阪芸術大学・大阪工業大学・大阪市立大学・近畿大学・東和大学・姫路獨協大学・神戸芸術工科大学・広島大学・九州大学・福岡大学・九州工科大学・九州産業大学・九州短期大学・佐賀大学・長崎総合科学大学

［その他の団体］
新日本建築家協会
ほか109団体

10号

くまもとアートポリス '92 全報告

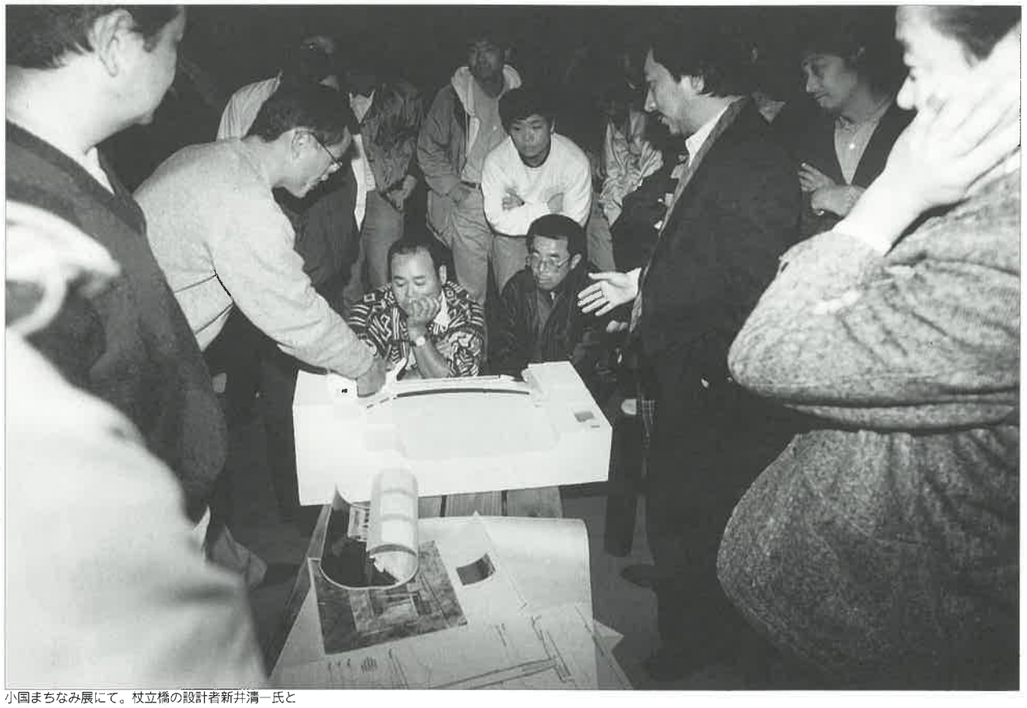
●くまもとアートポリス'92
1992年11月を中心に、熊本県内各地でさまざまなイベントが繰り広げられた。21世紀へのまちづくりとは何かを探る「くまもとアートポリス'92」である。
さまざまなイベントへの参加者総数は約[illegible]5,000人にのぼり、盛会のうちに閉幕した。
11月30日最終日、アートポリスフォーラムでは一連のイベントの報告がなされ、1988年に開始された第1期アートポリスのピリオドが打たれるとともに、くまもとアートポリス第2[illegible]
主催：くまも[illegible]

K·A·P

くまもとアートポリスニュース第10号
1993年3月発行
発行——くまもとアートポリス事務局
熊本県土木部建築課内　熊本市水前寺6-18-1
tel　096-383-1111 (内線6220／6221)
fax　096-384-9820
●編集——くまもとアートポリス
コミッショナー事務局
東京都渋谷区渋谷2-4-7 YK青山ビル
建築・都市ワークショップ内
tel　03-3407-4753　fax　03-3407-8753

kumamoto artpolis

1993年夏に始まった「くまもとアートポリス'92」の一連のイベントは11月30日の「アートポリス・フォーラム」をもってすべてのスケジュールを終えた。
この間、熊本県立劇場をはじめとする各会場では、熊本県内はもとより日本全国、海外の都市からさまざまなイベントへの参加者を集めた。その総数は延べ数十万を数える。
アートポリス'92は「都市にデザインを、田園にアイデア」を目指すくまもとアートポリス事業をひろく県の内外に披露するとともに、独自の


小国まちなみ展にて。杖立橋の設計者新井清一氏と

まちづくりを進める世界各都市の工夫と知恵を互いに交換するために開催された。
デザイン・サミットにはドイツ、フランス、スペイン、オランダなど、海外からも都市計画の専門家を迎え、白熱した議論が展開された。また建築ツアーや展覧会を通じて熊本県の建築文化がひろく紹介され、歴史と伝統の上に今日の熊本の環境があることが再認識されたのである。
一方、児童による建築物の絵画・工作や建築オリエンテーリング、アートポリス住宅での祭りなど、建物に住み、使う側からの声がいろんなかたちになって現われ、アートポリスがすでに生活の一部になっていることが感じられるイベントもあった。
「くまもとアートポリス'92」はまちづくりのプロフェッショナルから、小学生や幼稚園児まで、あらゆる立場からの参加者を得た、文字通りの建築大博覧会となった。そこで語られたこと、実験されたこと、見られたことのすべてが、これからのまちづくりの指標となっていくだろう。
そして、まちづくりとは、まちを計画する側、使う側双方がひとつになって初めて実を結び得るものだという実感も、この一連のイベントで得られた重要な成果である。

くまもとアートポリス'92 シンポジウム

まちづくり専門家が一堂に。

●開催されたシンポジウム一覧

◎ これからどうする八代のまちシンポジウム
日時：平成4年8月22日 13:30～
場所：ホワイトパレス出雲
パネリスト：伊東豊雄（建築家）、北野隆（熊本大学）、橋本和久（八代いしん青年隊隊長）、寺本絹子（主婦）
アドバイザー：西和夫　（神奈川大学）、コーディネーター：両角光男（熊本大学）

◎施工者シンポジウム
「アートポリスのつくり手大集合」
日時：平成4年10月3日 13:00～16:00
場所：熊本市青年会館
司会者：大住和子（慎書房）
パネリスト：千原政晴（岩永組）、永井安一（たしろ住設工業）、羽山真澄（岩下建設）、吉田耕三（旭木材工業）、松本康裕（熊本県建築課）、サポーター：桂英昭（熊本大学）

◎ 住宅ワークショップ「私たちのアートポリス住宅」
日時：平成4年10月4日10:00～18:00
場所：県営保田窪第一団地中庭
パネリスト：山本理顕（建築家）、野田氏、松崎氏、橋川氏（住民代表）、コーディネーター：延藤安弘（熊本大学）

◎ 設備シンポジウム
「快適な職・住環境の創造をめざして」
日時：平成4年10月21日 13:30～16:40
場所：県立劇場
パネリスト：松浦啓子（県立松橋西養護学校）、井上清明（安全ビル装備）、岩崎裕（不二電気工業）、藤本正一（上田商会）、松本安徳（松本設備設計事務所）、村上隆光（弦設備設計事務所）、コーディネーター：石原修（熊本大学）、アドバイザー：彦坂満州男（郷設計研究所）

◎ 構造シンポジウム「機能を超えた構造のゆくえ」
日時：平成4年10月24日 13:00～16:50
場所：県立劇場
パネリスト：佐々木睦朗（構造設計家）、坂本英俊（坂本英俊建築構造事務所）、広永諫（川崎設計事務所）、コーディネーター：三井宜之（熊本大学）

◎ ドームフリートーク
日時：平成4年11月14日 16:00～
場所：小国町民体育館（小国ドーム）
1「デザイン―小国の木造群がもたらしたもの」
パネリスト：浦田伸一（つなぎ物産ギャラリー所長）、井道行（産山村産業振興課長）、新井清一（建築家）、北山恒（建築家）、宮崎暢俊（小国町長）、鱸水盛春（小国町森林組合）、江藤訓重（木魂館館長）、コーディネーター：新納至門（建築家）
2「人・くらし・みどり―人々が選びとる地域とは」
パネリスト：森川義彦（福岡市）、網田誠（富合町）、ルチ・ナイタニ（熊本市）、橋本俊典（南小国町）、浜崎正充（小国町）、渡辺善孝（小国町）、穴見春代（小国町）、コーディネーター：浜田輝樹（熊本青年会議所）

◎ 都市デザインサミット（報告、各分科会報告・総括）
日時：平成4年11月5,6,7日10:00～
場所：県立劇場、メルパルクホール
各都市代表、［第一分科会］磯崎新［第二分科会］植田実［第三分科会］多木浩二［総括講演］八束はじめ

◎ アートポリス・フォーラム
日時：平成4年11月30日 15:00～
場所：県立劇場
スピーカー：鶴田幸三（熊本市）、井本愚英（八代市）、谷口強（玉名市）、井道行（産山村）、兼瀬哲治（清和村）、本村等（芦北町）、浦田伸一（津奈木町）、吉村喜代己（湯前町）、渡辺政一（松島町）、濱崎俊雄（河浦町）、コーディネーター：桂英昭（建築家）
特別講演：沖田嘉典（八代市長）
挨拶：堀内清治（くまもとアートポリス・アドバイザー）、福島譲二（熊本県知事）

都市デザイン サミット

世界まちづくりサミット

都市デザインサミット
期間：11月5日（木）～7日（土）
会場：熊本県立劇場、メルパルクホール
参加者：約2,000人（3日間）
国内、国外の建築家や行政関係者をパネリストに招き、現代のまちづくりと建築の制度、文化的意義などについて討論を行なった。進行は次の３部構成で行なわれた。(1) 海外と日本の都市で進行中のユニークなまちづくりのプレゼンテーション、(2)行政・住宅・建築文化を議論する分科会、(3) 最終日の報告・総括。開会式では、くまもとアートポリス・コミッショナーの磯崎新氏が基調講演を行なった。

くまもとアートポリス'92 開会式（11月5日）
会場：県立劇場演劇ホール
挨拶：福島譲二（熊本県知事）、三井康壽（建設省住宅局長）代理、古閑三博（熊本県議会議長）、田尻靖幹（熊本市長）代理
基調講演：磯崎新（アートポリス・コミッショナー）
(1) 世界の都市・プレゼンテーション（11月5日）
会場：県立劇場演劇ホール
プレゼンター：レム・コールハース（リール市／マスタープランナー、建築家）、ニコラ・スーリエ（ニーム市／都市計画事務所首席建築家）、マリー・エレーヌ・コンタール（パリ市／フランス文化省グランプロジェ担当大臣官房）、ロランド・ブルガルド（フランクフルト市／建設局長）、ピーター・ウィルソン（ミュンスター市／建築家）、ヘンドリカ・E・パッケル（ロッテルダム市／都市計画・住宅局部長）、オリオール・ボイガス（バルセロナ市／文化局長）、藤江秀一（富山県／富山まちのかおづくり事業プロデューサー）、小澤恵一（横浜市／都市計画局長）、八束はじめ（アートポリス・ディレクター）、座長：石島和光（熊本県土木部次長）
(2) 分科会（11月6日）
●第一分科会「都市と行政」
会場：県立劇場演劇ホール
パネリスト：ヨゼフ・マリア・リントホルスト（ロッテルダム市／副市長）、黒川紀章（奈良市／世界建築博覧会総合プロデューサー、建築家）、澤田光英（日本建築センター理事長、日本建築士会連合会会長）、ヘンドリカ=E・パッケル、オリオール・ボイガス、ロランド・ブルガルト、マリー=エレーヌ・コンタール、ニコラ・スーリエ、藤江秀一、小澤恵一、石島和光、座長：磯崎新
●第二分科会「住宅と生活」
会場：県立劇場大会議室
パネリスト：延藤安弘（熊本大学教授）、重村力（建築家、地域計画家）、早川邦彦、小宮山昭、松永安光、元倉眞琴、新納至門、西岡弘、坂本一成、妹島和世、富永譲、上田憲二郎、山本理顕（以上、アートポリス参加建築家）、磯田桂史（熊本県建築課長）
座長：植田実（エディター）
●第三分科会「建築と文化」
会場：メルパルクホール
パネリスト：安藤忠雄、トム・ヘネガン、石井和紘、伊東豊雄、桂英昭、篠原一男、エリアス・トーレス、ホセ・A.M.ラベーニャ（以上、アートポリス参加建築家）、ピーター・ウィルソン、レム・コールハース、座長：多木浩二（評論家）
(3) 報告・総括――閉会式（11月7日）
会場：メルパルクホール
報告：堀内清治（アートポリス・アドバイザー、熊本大学名誉教授）、磯崎新、植田実、多木浩二、八束はじめ、渡戸健介（熊本県土木部長）、挨拶：福島譲二（熊本県知事）

デザインサミット　世界の都市のまちづくり代表

1992年11月５日朝。熊本県立劇場演劇ホールは県外や国外からの顔も混じる、熱心な聴衆で満たされた。くまもとアートポリスの４年間を総括する国際イベント「くまもとアートポリス'92」の開会である。福島熊本県知事による開会の宣言は喜びに満ちていた。それは日本ではじめて、そして唯一の方式による広域的なまちづくり「くまもとアートポリス」を推し進めたこと、それによって単なる建設事業でなく、熊本県をベースにした情報の発信・受信を行うなど、さらに厚みのある文化事業にしたこと、そして今日、熊本県の人々をはじめ、世界の街から迎えたまちづくりの専門家に、これまでの成果を披露できることの喜びである。
これから３日間にわたって「都市デザインサミット」が繰り広げられる。ユニークなまちづくりを進める世界各都市のリーダーが、アートポリスに参加した建築家や評論家たちが、シンポジウム形式で様々なテーマをめぐって語り合う。
オランダ、スペイン、ドイツ、フランス、そして横浜市、奈良市、富山県から熊本にやってきたまちづくりの首脳たちは前日、くまもとアートポリスのプロジェクトを見学するため、すでに熊本市や八代市を中心に駆け巡っている。シンポジウムの前哨戦が済んでいるというわけだ。会場に臨んだ招待スピーカーたちは、膨大な量のスライドと資料を持ち込み、まさに都市の代表選手としての意気込みをみせた。
くまもとアートポリスのコミッショナー、磯崎新氏による都市デザインサミットの問題提起としての基調講演の後、１番バッターで壇上に上ったのはサミットのホスト、熊本県。「くまもとアートポリス」で４年間にわたって進められたまちづくりの成果がビデオで紹介した。以下、３日間にわたるサミットの内容を要約してレポートする。
（サミットの全記録は「都市デザインサミット報告集」をごらんください。）

都市デザインサミット第1日基調講演

磯崎新コミッショナーの基調講演

サミット全体へ問題提起として、日本における公共建築の設計システムを変え、そのことによって建設の事業を文化事業まで押し上げることの重要性、そして都市文化が継承され、累積されることの重要性を強調しておきたい。アートポリスでは従来のルールを大胆に変えずになしえた。これがひとつの目標に向かって計画を推進しようという意志をもった人々によって初めてなし得たことをも強調したい。

世界の都市・プレゼンテーション
まちづくり事業の競演 （11月5日）

フランクフルト市
ロランド・ブルガルド

ビジネスと犯罪の街として知れわたっていたフランクフルト市。公共建築の整備は概ね終わっていたこのまちに、市の豊かな財源を使って「何か」を付け加えようと、画策が1977年から始まった。

そこで生まれたアイディアが「ミュージアムの並ぶ河岸」。市の中心部を流れるマイン河に沿って、小さいながら専門化されたミュージアム（美術館・博物館）をいくつも建設し、楽しく散策できる環境をつくる、つまり「文化のインフラストラクチャー」を敷こうという構想だ。

ただ、市としてはいくつかのプロジェクトが完成し、一定の評価が得られるまで全体像は明かさなかった。強固な反対意見を事前に回避するための処置だった。

また質の高い審査委員会を組織し、ほとんどのプロジェクトの設計者をコンペ（設計競技）によって選んだ。

こうして「河岸美術館通り」（ムゼウム・ウファー）が１個の全体計画としてでなく、プロセスの中から出来上がっていった。「食べることによって、食欲は生まれてくる」のである。

以後15年間にフランクフルト市全体のイメージは向上したが、中でもこの美術館プロジェクトが果たした役割は大きい。

ミュンスター市
ピーター・ウィルソン

ミュンスターは1995年に市政1200年を迎える、人口27万の小さな商業都市。他のヨーロッパの都市と同様、都市のアイデンティティを確立しようとしている。市の中心部にゴシック様式の教会があるが、まわりの町並みと同じく、50〜60年代に再建されたものだ。

そこで市が画策したのは「最小の手段で最大の効果を上げる」ための都市計画だった。まず、市全域を舞台としたミュンスター国際屋外彫刻展が開催され、市立図書館が建てられることになった。私 はこの市立図書館を設計した。

市の中心に完成するこの建物は、子供や一般市民に親しまれるような様々なアイデアを盛り込んだ公共建築として計画・デザインされており、全国的な注目を集めることを期待している。

1987年に行なわれたミュンスター国際彫刻展は、市民が生活する町並みの中に40人を越える世界的アーティストがそれぞれのオリジナル彫刻を散りばめる、という新方式の美術展である。彫刻の舞台は公園のベンチだったり、バスストップだったり。作品はそのまま市民生活の中に受け入れられ、現在に至っている。この展覧会でミュンスター市は美術展覧会の都市として知られるようになった。

リール市
レム・コールハース

リール市で私（OMA）はユーラリール計画のマスタープランをつくり、計画を指揮している。

近々、リール市にTGVが開通する。同時にパリ、ロンドン、ブリュッセル、フランクフルトといったヨーロッパ主要都市が結ばれ、リールはその新しいネットワークの中心点となる。街そのものは変化することなく、まったく新しい価値をもつことになるのだ。

そこでTGVの駅とハイウェイを核とする80万平米の敷地に、様々な都市機能を複合的に計画することになった。それが「ユーラリール計画」である。この計画のねらいは、歴史的な町並みの近代化（敷地は歴史的街区の隣にある）であり、TGVの開通がもたらす<人とビジネスの新しい流れ> に対し、リール市が戦略的な都市として臨むことである。このチャレンジングな企画に踏み切ったリール市の決断力を強調しておきたい。

この都市計画の特徴は旧市街とは一度関係を絶ち切り、視覚的な結びつきをつくっていることだ。パリ―リール間が50分になり、都市と都市の距離感が変わる。そこでTGV駅の上にいくつかの超高層ビルを建設し、リールの新しいイメージとして<ハイパーモダニティ> （超近代性） を表現した。超高層ビルの設計にはジャン・ヌヴェル、クリスチャン・ド・ポルザンパルク、篠原一男らが当たっている。

この計画はTGV開通までの短期間にすべて完成させなくてはならない。様々なファクターの錯綜するこの計画には、建築上の可能性というより、管理運営上の可能性の大きさを感じる。この都市計画プロジェクトの建築的なファンタジーは、つねに政治的な（市の、市民の）修正を受けている。

実は敷地内のどこかに何も建設されていない「空白」を残している。これはこのプロジェクトの複雑さを象徴する美しい寓意になると思う。

ロッテルダム市
ヘンドリカ・エグベルディナ・バッケル

ロッテルダム市はヨーロッパ最大の国際港をもつオランダの経済的エンジンである。しかし、経済優先だけではいけない、市民に新しい生活基盤をも与えるより広範なマーケットを創出しなくてはならないという考えが生まれた。

第二次世界大戦後、市はモダニゼーション（近代化）によって再建された。街の発展はつねに市民の合意によって進められてきたが、西に向かって市が発展するにつれ、南岸の開発、港湾地区の活力低下による孤立化が懸念されるようになる。この地域に新しい都市機能を持ち込み、開発しようというのが「コープ・ファン・ズイド」計画である。

計画地は125ヘクタール。川で二分された都市機能を復活させようと、橋や地下鉄をはじめとするインフラストラクチャーを1995年までに整え、その後大量の住宅、オフィス、商業施設、リクリエーション・スペースなどを創出する、というシナリオである。さらに失業者対策として、ソーシャル・リターンのための訓練センターなども設けられる。

パリ市――グランプロジェ計画
マリー・エレーヌ・コンタール

1981年、ミッテラン大統領は就任と同時に「質の高い建築政策によってパリを刷新する」グランプロジェ（大建築）計画に着手した。そしてラ・ヴィレット公園、バスチーユ新オペラ座、大蔵省庁舎等のコンペが次々と開催された。事業の遂行にあたってはコーディネート組織である「関係各省間連絡会議」がつくられ、これはやがて大臣をもつ特別省に発展していった。

この事業がパリ市に対して果たす役割は市の東西に伸びる軸線――ルーブル宮ピラミッドから凱旋門、さらにデファンス地区を結ぶ線――の再活性化、そして東部地域（パリは第二次世界対戦後、主に西武地域だけが発展してきた）の大規模な再開発である。

例えばデファンス地区に建てられたグラン・アルシュ。このひとつの建築が現在、パリ市西部地域の都市計画上、重要な役割を果たしている。ラ・ヴィレット公園や大蔵省庁舎の東部地域への移転も、やはり似たような成果を生んだ。これがグランプロジェの哲学だ。

ニーム市
ニコラ・スーリエ

ジャン・プシュケが市長に就任した時期は、地方自治体が都市計画の主導権を取り戻した時期でもあった。つまり、分断していた都市を一貫性のある都市として見直すことが可能となったのである。

市長による都市開発の第一段階では外国からも建築家を招待し、建築設計をいくつか担当させた。そして第二段階では都市計画という枠組みでの推進が必要と考え、小規模な都市計画事務所（私、スリエが所属する）を作った。これは慣例化した思考をリストラクチャリングするための組織でもある。

ニーム市は人口５万の都市。しかし、ローマ帝国時代まで遡る歴史を誇る。その遺産がコロセウムとメゾンカレだが、バロック時代にはヴェルサイユ宮殿のような遠近法を持った庭園や水路がつくられる。20世紀になると今度は鉄道や自動車がこの街を変えた。

ニームは旧市街での建設（メディアテーク等）を進めるとともに郊外にも拡散し、分断化された都市機能をもう一度繋ぎ合わせる軸をつくりだそうとしている。しかも、それによって周辺のすばらしい田園地帯の環境を損なうことがないよう配慮もしている。

バルセロナ市
オリオール・ボイガス

1980年代、バルセロナ市は新しい都市計画を組織化した。それはスペインで民主主義地方行政が始まったことによる。

私達が進めるバルセロナのまちづくりはつぎの３点を軸としている。まず、ヨーロッパの他の都市のような「拡大」ではなく「再構築」、つまり質的な向上を目

都市デザイン サミット第2日分科会

指すこと。
つぎに都市はひとつの統一体としては捉えられない、自律的に存在する断片の集合としてしか捉えられないことを認識すること。つまり街区という小さな現実の集合として捉えることである。

そして最後に、都市のフォルムの重要性を認識すること。バルセロナ市では伝統的な街路、広場、庭園といった基本的要素の連続性を考えることが重要だ。
要するにこのバルセロナ市に関していえば、今世紀初頭のモダニズムよりさらに過去のものに回帰することが重要なのである。
このような前提から、我々はいわゆる「ビッグ・プロジェクト」として都市計画を推進するのではなく、むしろ個々の建築プロジェクトを規制しながら、その寄り集まりとしてマスタープランを理解するようにしている。また、都市の中心部と周縁部との対立を緩和するよう、中心部に住宅を建設し、周縁部をモニュメント化するなど、新たな関係性の創出を考えてもいる。
こうしたバルセロナの都市展望はオリンピック施設の建設の機会を得て、豊かに結実した。オリンピックの施設は、都市のフォルムが変化するような場所に建設した。組織化が行き届かなかった場所を組織化しようというのである。また、広場に彫刻を置いて周辺地域を再編成するなど、公共空間のデザインも組織的に行なった。
さらに、海岸地域を都市的空間に転換したり、都市街区ブロックを現代的に再構築する方法を探索している。

横浜市
小澤恵一
1971年、日本初の都市デザイン担当セクションが横浜市の企画調整局内につくられ、1982年以降は都市デザイン室となって現在に至っている。
最初に手掛けたのは市庁舎のすぐ脇にある公共歩行者空間「くすのき広場」のプロデュースだった。道路局や交通局の協力と連携を得て実現したが、その後も約15年間、広場周辺の民間のビルの設計も市民の要望をまとめてつくったガイドラインに合わせたり、それを「大通り公園」まで延ばすなど、一貫性のある環境づくりを進めた。
このような事業を通して点から線へ、線から面へと、施策を拡大していく手法を取っている。また、山下公園全面の町並みを整備するために市街地環境設計制度を設け、特に山手地区には山手地区風致保全要綱を敷くなど、行政指導の手法も同時に進めている。

さらに、歴史的建造物や緑の保存、水辺の空間の考慮など、横浜市ならではの活動目標を立てている。

富山県――富山まちのかおづくり事業
藤江秀一
他の都市とは対照的な、もっとも小さなプロジェクトである。日本では今「地方の時代」といわれながら、いまだ地域は独自のアイデンティティをもてずにいる。「まちのかお」事業は富山県内の市町村がもつ独自の文化や環境を見直し、けっして大きくはないが地域のシンボルとなるような建物や構築物をつくる、そしてその過程を通じて参加地域が互いに質の高い設計を競う、という仕組みの事業である。
具体的には3段階の「見立て」が核になっている。「場所の見立て」――地域の特徴をもっともよく表わした場所を探すこと。「プログラムの見立て」――どんな建物にするか、その建物が場所とどんな関係を取り結べるかを考え、それをマスタープランにして地域市民や行政の代表と議論し、決定していくこと。そして「建築家の見立て」。デザイン・アーキテクトをどのプロジェクトも外国から招聘し、地元の建築家とパートナーシップを組む、というシステムである。

地域の文化を国際的な視野で捉えることは、地域にとっては刺激となり、新たな文化的発展を呼び起こすことになる。
1993年春にはほとんどの計画建築物が出来上がる。それを各地域で利用していくうちに、また新たなまちづくりの動きが生まれてほしいと考えている。

奈良市――奈良世界建築博覧会
黒川紀章
1998年にJR奈良駅と奈良町を会場に世界的な建築家を招聘し、世界的な建築博覧会を開催する。駅前地区にはホテル、国際会議場など都市的な建築物を建て、歴史的街区では小さなスケールの住宅などの修復や改修を進める。

現在、プレイベントとして展覧会やシンポジウムを連続的に開催している。

第一分科会「都市と行政」
問題提起――磯崎新座長
各都市の行政体が過去何十年の成果をどう踏まえ、現在どのような視点や方法でまちづくりを推進しているのか、まずお話し戴きたい。
私見では、社会主義体制と資本主義体制の政治的対立はベルリンの壁崩壊以降、もはや消滅したが、日本やフランスにおいては本来社会主義体制のものである官僚主導型の都市計画が行なわれ、また社会主義体制下でも住民参加型の手法を取る国もある。経済体制と行政はこのように錯綜し、ねじれた関係を見せてきた。官僚主導型、住民主導型のふたつの手法の有効性についてここでじっくり議論してみたい。
果たしてこれらの手法に限界があるとすれば、これまでの経済効率、政治目標だけでなく、人々の生活に密着した広い意味での「文化」という視点を都市開発の評価基準を入れるべきではないか。現代都市は大きな意味での資本とメディアという強力な力によって組み立てられ、変化し始めている。これらは今までの計画手法では制御不能な要因だ。
むしろ行政もこれらの力をモチベーションとして受け取りながら、都市開発の価値基準を文化的、生活的視点に置き換えていくことが求められているのではないだろうか。

バルセロナ市／オリオール・ボイガス
バルセロナ市は社会主義政権。都市開発の指導に当たり、原則をつくった。都市はリベラリズムや民主主義だけではつくり得ない。都市にはある程度全体主義的で体系的な概念と計画も必要なのだ。そこには市民参画は必要ない。住民参加は具体的なプロジェクトから始めるべきである。都市計画は<制約する>のでなく<促進する>よう機能しなくてはならない。

フランクフルト市／ロランド・ブルガルド
1977年に新しい市議会が誕生したのを契機に、市の建設局が中心となって一連のミュージアムをマイン河畔につくっていった。そして建築家の選定はおもに設計競技（コンペ）方式で行なった。
「よい建築物はそれほどコストがかからないものだ」とよくいわれる。そのためにも優れた建築家の参加が特に重要であった。

ニーム市／ニコラ・スーリエ
市長が就任して第一段階の建築を建てた後、都市計画的・文化的にまちづくりを組織しようと、マスタープランナー（計画経済型プラン）を探したが、結局、小さな都市計画事務所をつくることになった。これは市が都市を動かすという大計画のために組むパートナーであり、顧問機関でもある。ここでつねにプロジェクト担当者との議論が行なわれる。
都市プロジェクトは文化的な性格をもち、人々に共有されてこそ都市プロジェクトである。

パリ市／マリー=エレーヌ・コンタール
グランプロジェの連絡会議はもとの官僚組織から離れることで、中央に対する批評が可能となった。これはニーム市の都市計画事務所と同じである。

ロッテルダム市／J・M・リントホルスト
現代社会において都市計画はもはや中央集権的なシステムで進められるものではない。パリ市でも、フランクフルト市でも、新しい方向へ進めるきっかけは政治が作りだした。ロッテルダム市は国際都市だが、この都市ならではの文化的可能性を探っていきたい。

日本建築センター理事長、日本建築士会連合会会長
澤田光英氏
日本の都市計画はインフラストラクチャーを決める都市計画と単体の建築を規定する建築基準法で二分されてきた。現在は土地利用が柔軟に行えるよう、行政も変革すべき時期に来ている。地方自治体の意志で固有のまちづくりをしてほしい。公営住宅法にも特色がほしい。

富山県／藤江秀一
富山は日本一住みやすいとされる県だが、各市町村の都市的基幹整備はやや画一的だった。ここに歴史的遺産や地域共同体の独自性をもりこんで、地域の特性を伸ばしていきたい。「まちのかお」はその核となる仕掛けと考えている。

ロッテルダム市／H・E・バッケル
コープ・ファン・ズイド計画を同じように大規模都市再開発であるリール市の開発と比較すると、前者の特徴は近代的都市の再開発であり、川によって二分された町を一貫したかたちで結び付けるという大きな目的をもっていることだ。

横浜市／小澤恵一
日本の都市計画には制約が二つある。民主主義の未成熟さ、そして地震等により制度に対して柔軟性がないことである。

熊本県／石島和光
くまもとアートポリスに対する批判は3点に絞られる。参加プロジェクトがデザイン優先、機能無視であるという誤解からくるもの。建築家と施工を担当する建設会社のコミュニケーションギャップ、点から面への<まちづくり>への発展性が考えられているかという疑問。こうした問題に対し、1993年度からの第2期で解決を図っていきたい。

都市デザインサミット第2日分科会

文化としてのまちを。

第二分科会「住宅と生活」
くまもとアートポリスで集合住宅を担当した建築家11人、そして集合住宅設計の経験をもつ建築家と研究者２人の計13人がパネリスト。「住宅と生活」をテーマに、集合住宅に焦点をあてて議論した。おもな問題点は次の３つ。(1)公営住宅をとり巻く問題。制度的な限界。(2)集まって住むことの意味。コモンスペースと個人、そして家族。(3)住宅設計の普遍解と個別解。風土と生活習慣。

植田実座長（エディター）
アートポリスでの公営住宅設計の経験を通じ、日本の集合住宅のデザインにかかわる制度的な問題点（建設コスト、設計料、面積などの規制）、公共空間に対する住民の考え、風土や文化など地域性や個別性の問題について議論していきたい。

磯田桂史（熊本県建築課長）
アートポリスの集合住宅は今まで熊本県が進めてきた「HOPE計画」と同様、多様性をもち、しかも福祉政策の一環として考えられた公営住宅政策の延長上に位置づけている。特にその多様性を、アートポリスの集合住宅では重視している。

山本理顕（県営保田窪第一団地）
公営住宅に対する一般の認識は、一戸建住宅に行き着くまでの<仮住まい>に過ぎない。しかし公営住宅も豊かな住環境に変えていかなくてはならない。保田窪第一団地では<パブリック(公共)――コモン(共有)――プライベート>という空間の序列を変えた。こうしてできたコモンスペースは住民に使い方を任せた。

新納至門（県営帯山A団地）
帯山A団地のコンペに当選し、計画案が実現することになった。敷地が保田窪団地に隣接していたので、連続性を意識した。また、外部に対して非常にオープンな構成とした。

元倉真琴（県営竜蛇平団地）
公営住宅の目的は福祉なのか。むしろ集合住宅ならではの生活空間のプログラムを作ることが重要だ。竜蛇平団地ではテラスを媒介に外部や他の住居と連続させている。また団地の外に対してもピロティを通じて開放した。

小宮山昭（県営新渡鹿団地）
公営住宅は都市の公共的資産であり、周囲の環境への調整機能を持たなくてはならない。新渡鹿団地は大きな道路に接した高層建築。「街路形成」と「集合して住む環境」が将来どうなるか関心がある。

妹島和世（再春館レディースレジデンス）
寮は集合住宅としては特殊なタイプ。集って生活するという意味で、集合住宅として取り組んだ。再春館女子寮では個室を出るといきなりパブリックな場所に出てしまう。住んでいるのはおもに18歳位の元気のいい女性たち。このスペースの性格は明確な意図をもって計画した。

坂本一成（熊本市営託麻団地）
託麻団地では団地内に閉じこもるのではなく、公園のような配置構成にして周囲の都市環境に対して開かれたものにした。かつての共同体を復活させるのではなく、各住居が地域を越えた<世界>と直面し、繋がるよう構成している。生活に密着した従来の住宅像が本当のものなのかどうか、疑問を抱いている。

松永安光（熊本市営託麻団地）
集合住宅の住まい方はもともとヨーロッパのもの。LDKの概念はそれを日本に持ち込むための媒体だった。しかし、空間の構成法や住まい方のパターンに齟齬がある。託麻団地では個室をなくし、間仕切りは襖、床は基本的に畳とした。これが真の意味で風土を考えることである。

富永譲（熊本市営新地団地）
日本の都市では、民間では細分化された土地の許容量一杯に開発する。これに対し、公営住宅の設計では余裕をもって都市への貢献を考えることができる。例えば公営住宅の資金や制度を利用しながら、都市内のネットワークづくりを考えることも重要だ。

西岡弘（熊本市営新地団地）
新地団地の敷地を見ると、県道沿いには電柱などが雑然と立ち、間に合わせの増築が行なわれていて、いわばアジア的な状況がそこにあった。そこで周囲に270メートルの長い壁面をつくり、様々な原色を使ってそれに対応しようとした。一方、中の広場は大きくした。住民に実際どう使われるか見ていきたい。

上田憲二郎（熊本市営新地団地）
周囲の建築と団地のデザインコード(設計のルール)が違っているのが気になっている。向こう三軒両隣をひとつのグループとし、人の繋がりが段階的に変化していくよう考えた。

延藤安弘（熊本大学教授）
集合住宅の設計では、外部との境界に仕掛けをつくることが必要だ。建設された住宅は「地」であり、そこに「図」を書き込むのは住民である。住民参加に対して、建築家は拒絶反応を持ち過ぎているのではないか。

重村力（建築家・地域計画家）
住宅はあくまでも住人が主役。住人の力を引き出すプログラムが住宅設計には必要である。世界的にみて、民間の力を引き出し、建設や維持管理のコストを安く上げるのが潮流。また、住人の自主管理という要素を加えることも大事だ。それには計画の中に「生活の型」とか曖昧さといったものを取り込む必要がある。

第三分科会「建築と文化」
建築のもつ社会性や文化的な機能について、次の３つのポイントをめぐって議論が進められた。
(1) 社会性と公共性、(2) 建築と現代社会あるいはプロメテウス的建築、(3)ローカリティとグローバリティ、あるいは東京文化と地方文化。

多木浩二座長（評論家）
文化とは多層の構造を持ち、生活のあらゆるところに浸透している。建築はきわめてインテレクチュアルなものであり、真に<建築的な>質(クオリティ)をもつことによって、初めて文化的であるといえるのだ。

安藤忠雄（県立装飾古墳館）
アートポリスが建築を社会的な出来事にした。古墳館ではランドスケープの建築を目指した。公共建築だからプログラムが最初に固定されていたが、建築のデザインしか考える余地がなかったことを逆手に取って戦略を進めた。

石井和紘（清和文楽館）
清和村という山村で、先細る伝統芸能の資料館を作った。この経験から、地方文化と地方自治の現状を思い知った。

伊東豊雄（八代市立博物館）
アートポリスのシステムよって自分に設計が依頼されたことの重要性を感じた。また、同時進行する他のプロジェクトを意識した。八代の博物館では前面に人工の丘をつくり、周囲の都市環境との調和を図った。今はメディアを通して現象的に現われた都市や社会と、現実の都市との二重性を考えている。

桂英昭（湯前まんが美術館・公民館）
熊本県内で公共建築をおもに設計してきたが、アートポリスの意図は強烈な個性をもった核を町や村の中にもつくりだすことだと考えている。この核は同時に広い視野を人々に与えていくだろう。

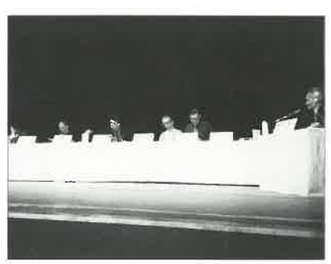
篠原一男（熊本北警察署）
日本の都市はアメリカの都市が三次元であるのに対し、二次元であり、しかも拡散された状態にある。アートポリスはその中に建築物で星座を形成していくような企てである。

ピーター・ウィルソン（ミュンスター市）
ミュンスター市というドイツの小さな町の真ん中で建築をつくっているが、中世以来存続してきた都市を実体的に考えても意味がないことを実感している。それほど現代の社会にはメディアが浸透しているということだ。ただし、建築をつくる上での私の態度はポジティブである。

レム・コールハース（リール市）
建築が政治や都市文化に対するメガロマニアックな手段として悪用されることがある。建築家は「プロメテウス」、すなわち人間に火という魅力と危険を併せもつ力を与える神のような存在になることもできる。強大な力をもち得る建築家の使命に対してはポジティブな態度で臨むべきだが、同時に批評的であり続けることも重要である。

エリアス・トーレス（県立美術館分館）
建築家は都市や環境に対する翻訳者といえないだろうか？ 無意味なものから意味を取り出していく人、という意味で。アートポリスの成功はさまざまな優秀な建築家に建築をつくる機会を与えたことにある。このシステムはスペインでも経験している。

トム・ヘネガン（草地畜産研究所畜舎）
日本ではこれから社会的な計画が建築を先導していくことになるのではないか。そこで新しい社会のプロトタイプを作りだす責任が建築家に生じるだろう。



アートポリス
展覧会

模型の中まちを見て回る

展覧会場となった県立美術館分館は「くまもとアートポリス」プロジェクトのひとつ。熊本城の足元という立地条件も手伝って、散策がてらにちょっと足を伸ばしてみたといった風情の親子連れや主婦グループなども、連日のように訪れた。
複数の展覧会が一堂に会したこともあって見学者はエスカレーターでまず最上階に昇り、階段で降りながら会場を巡るという仕組み。小さな「くまもとアートポリス」ツアーの体験である。
建築やまちづくりは、ややとっつきにくいテーマではあるが、模型やビデオ、あるいはスライド上映という展示システムによって、まちを散策するように展示を見学することができるという趣向であった。

会場はアートポリス・プロジェクトの県立美術館分館

くまもとアートポリス展　（下）熊本のまちなみと建築展

（下）くまもとアートポリスの実施施工図面の展示閲覧コーナー

期間：11月4日～30日
場所：県立美術館分館
会場デザイン：セラヴィ・アソシエイツ
アートポリスの全プロジェクトを模型や写真パネル、ビデオで紹介した「くまもとアートポリス展」。熊本県に建てられ、県民に親しまれた歴史的建造物などを写真パネルで紹介した「熊本のまちなみと建築展」。世界11都市のユニークなまちづくりを写真、模型、映像などで立体的に紹介した「世界のまちづくり展」。さらに関連事業としてストリートファニチャー・コンペ、キオスク・コンペの入賞作品展も開催された。
また、アートポリス・プロジェクトの設計図面を閲覧するコーナーを配したり、紹介記事などの掲載された関連書籍展示も行なわれ、多角的に今日の熊本県の建築文化を紹介する、多角的な展覧会シリーズとなった。
各展覧会タイトル：
・くまもとアートポリス展
・熊本のまちなみと建築展
・世界のまちづくり展
・アートポリスデザインコンペティション入賞作品展
入館者総数：約8,000人

アートポリス
展覧会

世界のまちづくり展

展覧会場を訪れた建築関係者や学生は、展示された模型や実施図面を熱心に見入り、メモをとる人もいた。アートポリス・プロジェクトはどのような設計作業の末に実現したのだろう？ 設計図や施工図などをじっくりと読み込もうとする姿がよく見かけられた。
美術館の最上階は自然光が差し込む展示空間。アートポリスのプロジェクト模型が林立する様は、さながら熊本全県を空から見下ろした光景を思わせた。
会場のミニツアーを終えた見学者は4階の喫茶室でひと休み。大きな窓の目の前に広がるのは熊本城の勇壮な石垣である。お茶を飲みながら建築やデザインの話に花が咲いた。

都市体験を再現する　ビデオ・スライド・イルミネーションを駆使した展示空間

アートポリス まちなみ展
八代・熊本・小国

熊本県中がアートポリス'92だった日々。アートポリス・プロジェクトを核に、熊本県中がまちづくりを実践した。秋の「アートポリス'92」にさきがけて、八代市では一足早くまちづくりイベントの幕が切って落とされた。
バトントワラー・ブラスバンドの足並みも軽く、まちづくりイベントがさまざまに企画された八代の町並みを、アートポリスのパレードが練り歩いた。「こんな日が来るのを待っていた」とはまちづくり運動を進める商店街の店主氏。
やがてまちづくりイベントの興奮は熊本市内にも飛び火。上通りのショーウインドーは軒並みアートポリス作品で占拠された。世界の椅子展、新旧まちなみ展。北警察署には小学生が書いたアートポリス絵画が貼りめぐらされた。

●まちなみ展
◎八代まちなみ展
期間：8月17日～23日
場所：八代市立博物館、八代市の中心商店街、八代市総合体育館、ホワイトパレス出雲ほか
都市ギャラリー回廊展、シンポジウム、ミニコンサート、アートポリス祭など各種の催しを開催。これに先立ち、街並・建物の写生・写真コンクールを実施し、作品を期間中展示した。
参加者：約5,600人
(都市ギャラリー回廊展の見学者を除く)
◎熊本まちなみ展
期間：11月1日～8日
場所：熊本市の上通り界隈
ウィンドーギャラリー、新旧まちなみ展、ジョイントアート展、創作生け花展、児童絵画コンクール作品展を開催したほか、それぞれの会場をチェックポイントとして体験オリエンテーリングを開催した。
参加者：約5,000人
(ウインドーギャラリーの見学者を除く)
その他
◎気ままに遊ぼう立田山工作広場(1992年8月)
◎私たちのアートポリス住宅
◎施工者シンポジウム
◎設備シンポジウム
◎構造シンポジウム(以上 1992年10月)

「私たちのアートポリス住宅」熊本県営保田窪団地の中庭を埋め尽くした住民と近隣の人々

「熊本まちなみ展」上通りに設置されたオブジェ

八代市立博物館の前での「まちなみ展」

アートポリス祭で徹底討論（左より新納、妹島、伊東、桂の各氏）

八代・熊本・小国へ。

アートポリス まちなみ展

山村の小国町でも八代・熊本を引き継いで、ユニークなイベントを繰り広げた。ゆうステーションで開催されたアートポリスの展覧会や、小国ドームに設置した世界一のコタツ(ギネスに挑戦した？)で徹夜の大激論など、密度の濃い一週間となった。

●小国まちなみ展
期間：11月9日～15日
場所：小国町ゆうステーション、小国ドームほか
アートポリス展のほか、公募したデザインコンペの入選作品を実際に制作し展示した。また、ドームフリートークを開催し、世界一の大コタツを囲んで延々と環境デザインについて語り合った。
参加者：約1,300人

小国の夜は更ける――ドーム・フリートーク

世界一長いコタツ。あれ、外国にもあるんだっけ？

小国まちなみ展（上・左）

気ままに遊ぼう立田山工作広場

熊本まちなみ展

アートポリス 見学会

アートポリス。熊本縦断駆け巡り

玉名天望館にて

熊本縦断建築ツアー。新観光資源発見。「アートポリス'92」に参加したほとんどの人が、熊本県中に建設されたくまもとアートポリス・プロジェクトの見学・視察を目玉イベントにしていた。特に11月はモデルコースが設定され、アートポリス'92見学会バスが運行された。
これに乗り込む客のほとんどは建築のプロ。なるほど、メモを取りつつ、マップを確かめ、カメラのシャッターを連写している。真剣勝負の気迫が感じられた。
とはいえ、装飾古墳館や文楽館ののどかな環境の中ではどんな人も「ここで一服休憩」。忙中閑ありのひとこまである。これらの建物は新しい観光資源として売り出し中のアートポリス・プロジェクト。
また、熊本縦断駆け巡りのさ中に見える雄大な自然環境やひなびた農村風景も、熊本の貴重な資源であることを再確認させるツアーともなった。

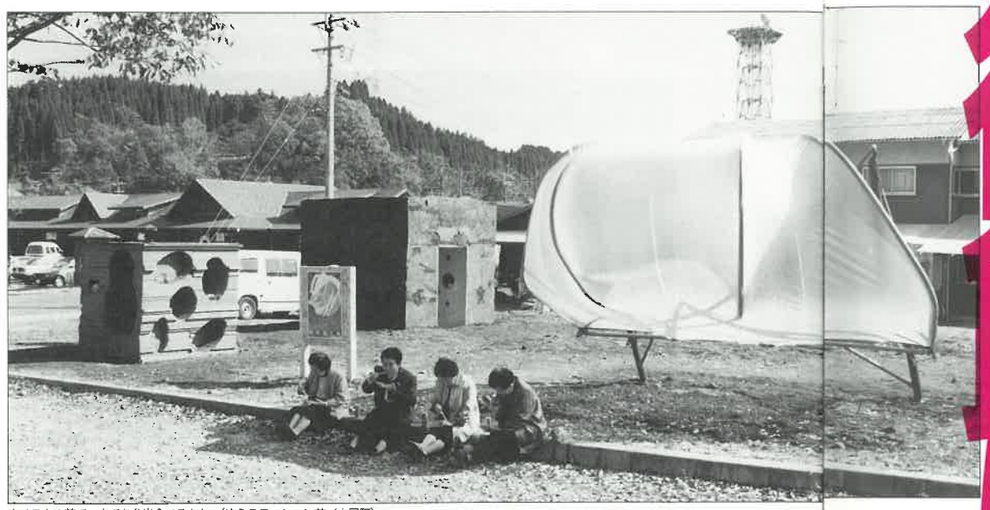
●アートポリス見学会
期間：11月4日～30日
内容：見学のモデルコースを設定し、貸切バス90台が運行された。また、見学者の便宜を図るためにサイン看板を設置したほか、各関係の施設にはスタッフ等が配置された。
見学者：約110,000人（熊本城等を除く）

熊本市営託麻団地で質問に応じる松永、坂本、長谷川各氏

アートポリス
コンペティション

キオスク、ベンチは、土に戻り、美術館へ。

「アートポリス '92」の中でも特に高い関心を集めた公開設計コンペティションは多数の若い建築家、デザイナー、学生の参加を得、数々の意欲的な作品を集めた。
塚本／貝島、ヨハネス、佐々木各氏のキオスクは実際に小国町の郊外の畑の中に建設された。近所の農家の人々は突如現われたキオスクに初めはこわごわと遠巻きにしていたが、中を自由に遊び回る子供たちにつられて、お昼御飯をここでと親しみ始めた。中でも目を引いたのは塚本／貝島両氏による土製のキオスク。土から生まれ、土に帰る、自然の営みそのものを建築にしたものだ。
一方、ベンチには中尾、岡本、松島各氏の案が製作され、アートポリス展覧会の会場となった県立美術館分館に展示された。展示会終了後も、松島氏の椅子を休憩用にという要望があり、設置が決まった。


キオスクの前で、さてお弁当食べるかな　(ゆうステーション前／小国町)

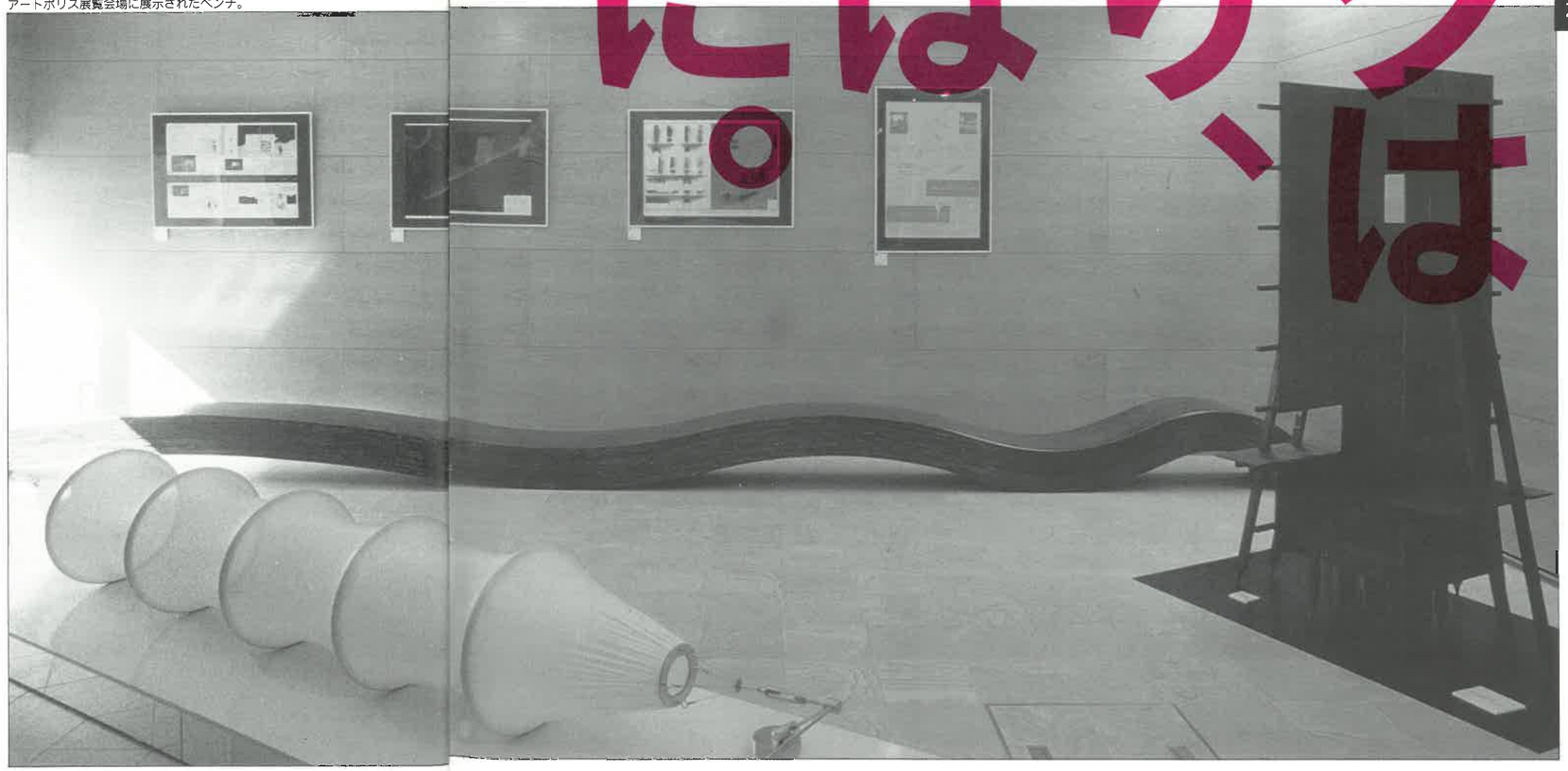
■くまもとアートポリス'92デザイン・コンペティション
くまもとアートポリスでは、事業の一環として「都市にデザインを、田園にアイデアを」をテーマとするふたつのデザイン・コンペティションを開催した。コンペ入賞案のうち実現可能な入選作品を実際に製作し、その一部が展示された。また入賞作品および応募案のうち、審査員が優秀と推薦した案も展示された。

■第1部門　課題「都市に浮かぶベンチ」
ストリートファニチャーは、都市景観を構成する大事な要素のひとつ。ここでは数あるストリートファニチャーの中からベンチに着目し、魅力あるベンチの提案が求められた。ベンチは、そこで人がすわり休むといった極めて単純な機能をもっている。単体のベンチもあれば、他のストリートファニチャーと複合したものもあるだろう。都市生活者にふさわしい、都市の装置としてのベンチが多数提案された。
審査員：磯崎新(くまもとアートポリスコミッショナー／建築家)
応募数：241点
審査結果：入選3点
中尾寛(NAKAO SERIZAWA ARCHITECTS)―東京都
岡本明子(DC)―東京都
松島弘幸(フリー)―神奈川県

■第2部門　課題「田園に佇むキオスク」
キオスクは本来、駅前や広場にある新聞、雑誌や花を売る屋台風の小屋を意味し、誰もが気軽に立ち寄れる場所であるとともに、視覚的な環境装置ともなっている。都市でなく田園の中に置かれるキオスク。このキオスクは、郷里の物産や野菜などの販売を行なう無人の販売所となるが、応募者の自由な発想が求められた。
審査員：浅石優、大島哲蔵、大野秀敏、奥平与人、北村修一、ジョージ・国広、妹島和世、新納至門、浜田邦裕、古谷誠章、渡辺誠(建築デザイン会議実行委員会メンバー)
応募数：109点
審査結果：優秀賞5点
塚本由晴・貝島桃代(東京工業大学坂本研究室)―東京都
ジン・ヨハネス(AAスクール)―英国
佐々木龍郎(デザイン スタジオ)―東京都
吉永健一(東京工業大学坂本研究室)―東京都

キオスク・ベンチコンペ優勝者、表彰会場で　(県立劇場)

アートポリス展覧会場に展示されたベンチ。



テグ・ヨシノブ・ニシモト(Taeg Nishimoto and Allied Architects)―米国
このうち塚本・貝島案、ヨハネス案、佐々木案の3点が小国町に建設された。
■主催　くまもとアートポリス'92実行委員会
■協賛　熊本市、小国町
■協力　建築デザイン会議
(敬称略)

アートポリス 関連イベント

湯の香まつりの手作りイカダレース（湯の香橋付近）

熊本北警察署で開催されたくまもとアートポリス児童絵画展

手づくりのまつり、フェスティバル
まちづくりのイベントはさらにいろんな市町村で催された。専門家同士の徹底した議論、ゲストを招いた講演会、絵画展など、盛り沢山の内容だった。

●くまもとアートポリス'92 関連事業
「くまもとアートポリス'92」の趣旨に賛同する市町村および団体等により、次のような催しが開催された。
参加者総数：約43,300人
◎湯の香まつり　湯浦活性化協議会／8/1・2
◎玉名天望館見学会・講演会
熊本県建築士会玉名支部／9/26
◎くまもと木造建築研究集会
くまもと県産材振興会／9/29
◎徹底街論　熊本まちづくり協議会／11/2
◎建築団体会員作品展　建築士事務所協会、新日本建築家協会、建設業協会建築部会／11/6〜9
◎九州インテリアデザインinくまもとアートポリス
九州インテリアデザイン実行委員会／11/10〜23
◎海外まちづくりスライド発表会
熊本県建築士会／11/10・17
◎北山孝二郎講演会　津奈木町／11/13
◎木の構造シンポジウム　清和村文楽の里協会／11/16
◎景観フォーラムin 人吉
景観フォーラムin 人吉実行委員会11/20
◎漫画家の絵画展、'92国際（漫画・食）文化フェスティバル　湯前町／11/1〜1/6

アートポリス フォーラム

成果をまちづくりへ

閉会の挨拶
福島譲二熊本県知事

●アートポリスフォーラム
期日：11月30日
会場：県立劇場
参加者：約900人
プロジェクト参加市町村からのリポートを交えたフォーラムを開催し、「くまもとアートポリス'92」を締めくくり、第二期に向けての新たな出発点とした。
◎くまもとアートポリス'92報告
出演：上田薫二郎（見学部会長）、岩永眞（シンポ部会長）、近田一夫（展示部会長）、桂英昭（まちなみ部会長）、中川久（関連事業部会長）、中川誠之（広報記録部会長）
◎市町村報告「地域からの発信」
出演：桂英昭（熊本大学講師）、鶴田幸三（熊本市）、井本惠英（八代市）、谷口強（玉名市）、井道行（産山村）、兼瀬哲治（清和村）、本村等（芦北町）、浦田伸一（津奈木町）、吉村喜代己（湯前町）、渡辺政一（松島町）、濱崎俊雄（河浦町）
◎特別講演　沖田嘉典（八代市長）
<挨拶> 堀内清治（くまもとアートポリス'92実行委員会副会長）　<閉会宣言> 福島譲二（くまもとアートポリス'92実行委員会会長）

「くまもとアートポリス'92」の最後を締めくくる「アートポリスフォーラム」が1992年11月30日、県立劇場演劇ホールで開催された。このフォーラムは夏から熊本県全域で繰り広げられてきた一連のイベントの成果報告を行なうとともに、アートポリス事業第二期への出発点となるイベントであり、いわば1988年から始まったアートポリス事業４年間の総決算となった。

世界の街から熊本のまちづくりを見にやってきた
この間、くまもとアートポリスを見学に、いや参加するために熊本を訪れた人、熊本で実際にこれらの活動に参加した人を数えれば、のべ数十万を越えるだろう。だから当日、会場を埋めた聴衆の大半は関係者と言っても過言ではない。何らかのかたちでこの一連のイベントを運営したり、参加したり、積極的に応援したりした人々が大半を占めていたのである。会場は開演十分前にはほぼ満席、それぞれがこの数箇月の心地良い疲労と充実感を噛みしめているのが伝わってくる。慌ただしく演台にならんだ各イベントの報告者も、こんなわけで客席の聴衆にはよく知られた顔となっていたはずである。

報告は、アートポリス'92のイベントすなわちプロジェクトの見学部会、シンポジウム部会、展示部会、まちなみ部会と進められていった。たとえば、同じくユニークなまちづくりを推進する海外の都市からゲストを招待した「都市デザインサミット」、一方で保留建築一団地で周囲の住民も参加して手作りのパーティを楽しんだ住宅ワークショップ、小学生のパレードや強度芸能の太鼓演奏があった八代のまちなみ展など、ヴァラエティに富んだ活動の数々である。

その他、関連事業として芦北町で開催されたいかだレースや浴衣ファッションショー、あるいは木造建築技術や建築施工者インテリア・デザイナーなど、専門的なシンポジウムも報告された。

東京や大阪や横浜で開催された都市サミットや万国博覧会といった大イベントにはない手作りの温かみがKAP'92にはあったのである。一方、サミットにありがちの、VIP要人の単なる表敬訪問を越えた実質的な討議が行なわれたのもこの事業の特徴である。招待された海外都市やここに参加した国内の都市は、けっして大都市ばかりではない。しかし都市行政の運営、都市文化の創造にあたっては、それぞれの事情があり、独自性を打ち出すことに真剣なのである。少しでも多く他の都市のアイディアを知りたい、これがその真剣さの背後にあったものだろう。これは事業の企画者熊本県にとっても同じことである。

アートポリス・プロジェクトの文化的広がり
引き続きアートポリス・プロジェクトの建設と運営に実際に携わってきた各市町村の代表が立った。あちこちで建築が出来たことによって、さまざまな文化的（騒動も含めて？）広がりが利用者、住民の中で起こり、あらためて建築の持つアイディアやデザインの可能性と力を感じさせるという報告である。

特別講演を行なった八代市長の沖田氏は、市立博物館が八代の新しい名物となったことを挙げ、経済的にも、文化的にも採算が合い、将来のまちづくりの核になるものと考えていると、言葉を結んだ。

アートポリス第二期へ向けて
このあと、くまもとアートポリスアドバイザーとして、アートポリス'92の実行委員会副会長をつとめた堀内清治教授が報告に立った。堀内氏はまずアートポリスの目的を「建築を本来の王道に戻すこと」であると説明した。「用・美・強」すなわち、機能、構造、デザインというわけだ。これらが一体となってはじめて建築と呼べる。しかし、これはアートポリスの役目の半分でしかなく、周囲に良い環境を及ぼし、豊かなふるさとづくりの支援をしてゆかなくてはならない。そして、この仕事こそ、つまりアートポリスをきっかけにしてまちづくりの対話ができる場を作ることが第二期アートポリスの目標ではないだろうか。氏はこのように提案した。

最後に演壇に立った福島知事は、くまもとアートポリス事業が県内だけではなく、県外からもたくさんの参加者を得て熊本を強く印象づけたこと、そして、何より文化的、個性的な地域の創造には長い間継続して推進することが大事であることを強調し、くまもとアートポリス第二期へ向けての抱負を語った。

「ローマは一日にしてならず」の格言を引くまでもなく、まちづくりの事業は時間がかかる。その意味でユニークさによって、名を上げたくまもとアートポリスはまたその入り口に立ったばかりだ。ここから先はまだ長い。より文化的で、ひろく市民の声を取り込んだ戦略が画策されなければならない。その第一歩として、今回の一連の事業は、先例に耳を傾けようということでも大きな成果をあげたといえよう。

手作りのまちづくりを進めてきた小学生もお年寄りも、遠くパリやバルセロナからやってきた建築家や都市行政者や市長も、アートポリスのことばをきっかけにで楽しく語りあうことができた。こんな実感と感動が、このフォーラムをもってすべての日程を終了した参加者の胸にこみあげてくるのだった。